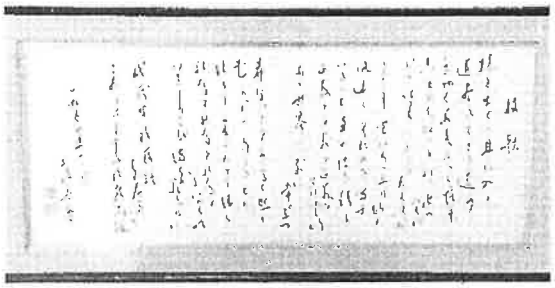
校歌が紡ぐ幾多の思い

文人の武蔵野

土岐善麿 ④

皆さんは、母校の校歌をおぼえていますか？

ある調査によると、21世紀の今、学校の校歌の作詞作曲者として人気を博しているのは、山口智充、大黒摩季、つんくｏだそうです。3人とも、対象に寄り添った作詞作曲を1人でできる才能溢れる人たちですが、かつての校歌は分業制で、作詞は詩人が担当し、作曲は西洋音楽を専門的に学んだ作曲家が担当しました。昭和までのベスト3をペアで選ぶとすると、北原白秋と山田耕筰、西條八十と古関裕而、土岐善麿と信時潔でしょうか。その中でも、最も数多くの校歌を作ってきたのが土岐と信時のペアで、むさし野文学館の調査によると、土岐善麿が作詞した校歌280曲のうち127曲が信時との共同制作でした。



都立武蔵高校・付属中学校の校内に掲げられている校歌の額

過去から未来へと受け継がれていく校歌は、歌う身体の共同体を形成し、学校空間という不変の場に刻まれた記憶を再生できるメディアとなります。

土岐が作詞した校歌から「武蔵野」の範囲をさぐると、国分寺、府中、調布、武蔵境、小平、中野、杉並、渋谷あたりが該当します。そこで歌われてきた武蔵野は、概ね欅や芒があり空や月がよく見えて富士や秩父を望める場所でした。「武蔵野　武蔵野　その名負いて　われらは学ぶ」と歌われる都立武蔵高等学校の校歌は、「武蔵野」への想いが特に強く感じられて印象的です。

土岐善麿は、「わがために一基の碑をも建つるなかれ／歌は集中にあり　人は地上にあり」を固い信念としていました。故人の遺志に基づき歌碑にはなりませんが、今も校歌というメディアを通じて彼の歌がたくさんの人に歌われています。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

おすすめの1冊

「万葉以後」

戦後数年に土岐善麿が書いた歌論歌話から編んだ本です。土岐は石川啄木を世に出した人ですが、ここでは与謝野晶子、斎藤茂吉、釈迢空（折口信夫）ら親交のあった武蔵野ゆかりの文人に触れています。また、大正期に土岐哀果名で創刊した文芸誌「生活と芸術」所載の「歌壇警語」も資料として収録しています。

（春秋社、むさし野文学館蔵）

武蔵野

武蔵野支局　〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1　3F
電話　0422(51)3131
FAX　0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局　電話03(3631)6116
立川支局　電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette　03(6272)9027
【折込チラシ】　0120-03-4343
【読売旅行】　03(5550)0666

■ あすの暦

4月16日（金曜日）
旧　3月5日＜先勝＞

通日 106
月齢 4.0
（正午）

＝東京標準＝

日出	5.07	満潮	6.22
日入	18.15		19.42
月出	7.25	干潮	0.51
月入	22.05		13.12
			（中潮）